

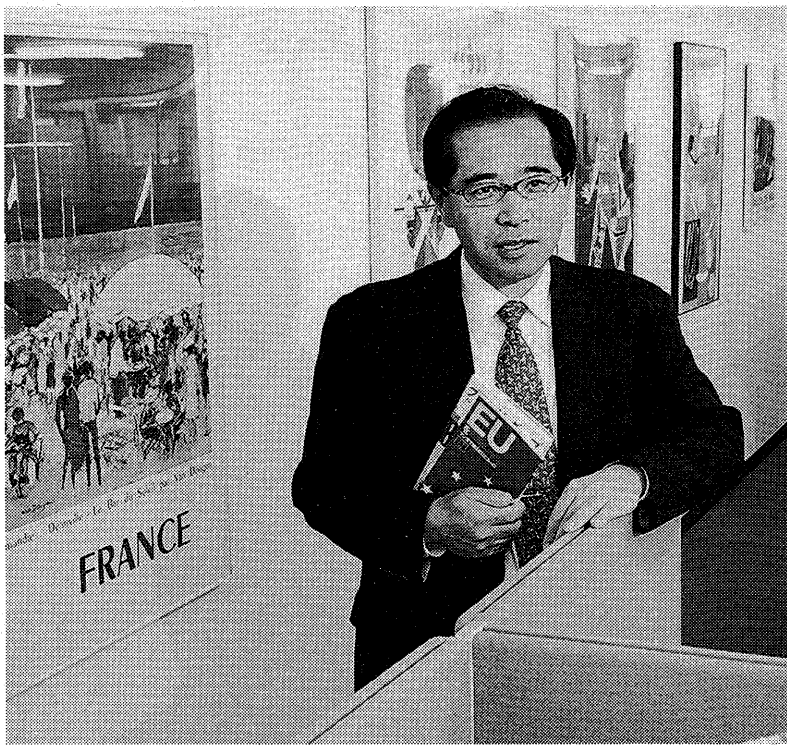
「50歳プラス」を生きる

「理想」まだ3割 社員と追い求め

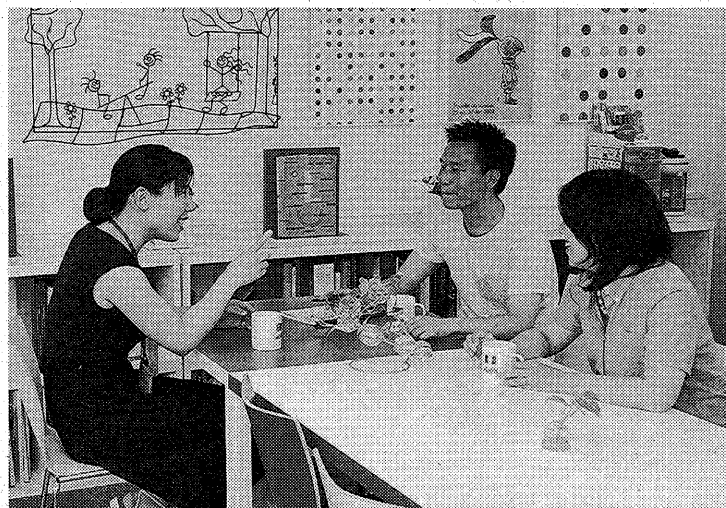
「六十歳で定年退職して趣味や海外旅行を楽しむみたいというような考えは、私にはまったくなかった。体力的にまたやれるという自信があったし、第一、線で現役を続けていきたいという気持ちに迷いはなかった」

翻訳会社アラヤ社長の中畠重富さん(59)は、三年前の五十六歳で起業を決断したときの気持ちをこう振り返った。柔らかな物腰と、穏やかで人懐こい笑顔が印象的だ。「これといった取りえない私だが、人に誇れるのは、素晴らしい人によく出会えたこと、その出会いを大切に生きて

翻訳会社を起業 中畠 重富さん(59歳)



①華やかなポスターが飾られたオフィスで話すアラヤ社長の中畠重富さん ②アート作品が飾られた休憩室で笑うアラヤのスタッフら(いずれも、東京都目黒区で)



たこと。キーワードは「人」。高校を卒業後に三井銀行(当時)に就職。四十

歳のときに取引先からの強い誘いで翻訳会社に役員待遇で転職した後、同社の他の幹部との経営方針の違いで独立を決意し、三年前に実行に移した。数人の部下が行動を共にした。

「仲間がついてきてくれたのは大きかった」高校三年進級の直前に母親が病死し、父と弟との三人の生活に、「多感な時期だったから父親と衝突することも多く、大に進学する選択肢もなかったんだ」と話す。「ここからは自分一人で生きている規模で、社員も百数十人、世界でも有数の決めた。いつもそう。まず行く先を決めちゃって、それからそこで必要な勉強をしてきた」

「翻訳会社への転職が決まった時も、語学学校に通って必死で英語を勉強しました。できるかできないかじゃない。翻訳会社で英語は絶対に必要で、何が何でもやるしかなかった」

「社員が切磋琢磨して成長して、独立してやろうっていう者が一人でも出てくれると頼もしいと思うているのだが。私も理想を達成するまで、あと最低五年は辞められない。まだ若い人には負けませんよ」

「大勢の人を導き、会社の方向性を決める経営の面白さを知ってこまつた」
中畠さんのブログ
http://blog.goo.ne.jp/alaya2006/
転職の時も起業の時も (渡部 稜)

妻は賛同してくれた。二人の娘がすでに独立し、教育費の不安などがなかったことも大きかった。さまざまな製品の取扱説明書などの翻訳を主な業務にしている。元いた会社から裁判に訴えられるなど設立当初は苦労もあったが、それも解決し、経営は順調。今年は十億円弱の売り上げ達成は確実だという。

東京都目黒区の代官山のオフィスには、新会社設立直前に知り合った画家やインテリアデザイナーの勧めで飾った絵がずらりと並び、休憩所のスペースにもぜひたくに取り入れた。「社員が伸びると、楽しく仕事ができる雰囲気大事にした」という。

それでも「まだ理想の30%」と話す。「五年後には、会社も今の倍くらい規模で、社員も百数十人の、世界でも有数の翻訳会社にしてみせる。経営者として、自分が伸ばしていかないといけない」と